

縄文文化【火焰型土器】

縄文時代（紀元前 14,000～350 年）の特徴は、新石器時代の遊動生活様式から、500 人もの人数による固定式住居での狩猟採集生活へと変わったことである。この変化は、土器の発明という大きな技術的進歩により始まった。「縄文」という名前も、出土したこの時代の最初の土器に縄目の文様が付けられていたことに由来している。約 1 万 1500 年前に氷河期が終わると、気候が安定して、植物がより広い範囲で密集して育つようになった。土器によって、縄文人はこれらの植物を新たな食料源としたうえ、調理した堅果類、根菜類、肉、野菜類などを食生活に加えることができるようになった。食料が豊富になったことで人口は劇的に増加し、その後の 8,500 年間で 5 倍、10 倍と増え、紀元前 3000 年には 20 万人もが日本列島に定住していた。

博物館に収蔵されている火焰型土器（かえんがたどき）が作り出されたと考えられているのも縄文時代中期である。この土器は、縁に形作られた炎のような印象的な装飾が特徴的だ。丸底または尖底で主に屋外で使用された縄文時代の非常に初期の土器とは異なり、火焰型土器の厚さは薄く、住居内で使用できるよう平底になっている。

十日町（とおかまち）市博物館が所蔵する 928 個の出土品のコレクションは国宝に指定されており、そのうち 57 個は深鉢形・火焰型土器である。十日町の笹山（ささやま）遺跡で発掘され、博物館で展示されている「火焰型土器 No.1」は、奇跡的に原形を 95%留めた状態で発見された。

縄文時代を研究している科学者にとって、火焰型土器は謎の対象である。炎の形をしたその装飾が何らかの明確な役割を果たしていたわけではなく、すべての土器に炭化物の跡があったわけでもなかったことから、必ずしもすべてが調理に使用されたのではないようだ。この独特の炎のような形をした土器は、信濃川（しなのがわ）中流域で主に見つかっている。このことから一部の研究者は、デザインと形状はその地域の独自性を表す象徴であり、当時のその地域の宗教や神話を洞察できるのではないかと考えるようになった。一方で、渦巻きや上部の模様は川を流れる水を表現しているという理論を立てている研究者もいる。